論 説

修復的正義と真実和解委員会の理論的基礎
 —— Villa-Vicencio の理論の検討 ——

宿 谷 晃 弘

- 一 はじめに
- 二 修復的正義の理念と狡知
 ——ヴィラ・ヴィッセンシオの修復的正義論について——
- 三 神学と修復的正義論
- 四 若干の検討

一 はじめに

修復的正義ないし修復的正義・司法については、その推進者・擁護者に見られる理想主義的・福音主義的 (evangelical) な熱狂に対して、疑問の声が上がっていないわけでもない⁽¹⁾。とくに、従来の刑事司法システムに対する批判のみに終始して、実のところ、自分の足元を見ていないのではないかという懸念は、それなりの根拠をもつものといえるであろう⁽²⁾。このことは、restorative justice (以下、RJ と表記) を思想的な側面から把握する論者であろうと、あるいは実践のみに特化して考える傾向をもつ論

(1) See Andrew Ashworth, "Is Restorative Justice the Way Forward for Criminal Justice?," in Eugene McLaughlin (eds.), *Restorative Justice: Critical Issues* (London: Sage Publications, 2003) p176.

(2) See John Pratt, "Beyond evangelical criminology: the meaning and significance of restorative justice," in Ivo Aertsen (eds.), *Institutionalizing Restorative Justice* (Cullompton, UK: Willan Publishing, 2006) pp46-53.

者であろうと、意識せざるを得ないところである。

しかしながら、だからといって従来の刑事司法システムの欠点を見過ごしてよいというわけでもないように思われる。RJの当初の理念を忘れ、妥協に妥協を重ねて、どうにか「修復的司法」の名を冠したプログラムをシステム内に押し込んだはよいが、それがRJ本来の意図とは異なるものであるどころか、従来の刑事司法システムの欠点を助長するものでしかないとしたら、そもそもRJなど主張しない方がよかったということになりかねないであろう。RJの擁護者は、被害者の心情を考慮することなく、世界的な流行に流されているだけではないかという批判ないし疑問の声⁽³⁾に真摯に応答するためには、熱狂主義あるいはオポチュニズムのそれではあり得ない思想の根と冷徹な戦略を示す必要がある。それは、殺人などの、明らかに重大な犯罪のみを念頭に置くものではない。それは、いわゆる被害者同士でも、人間の限界ゆえに理解することが一般的に困難なものから出発する。つまり、例えば、一般的には想像し難いような長き歳月にわたって、あるいは時、場所、その行為主体、そして個々の行為の程度をも取り替えつつ、それでも特定の人物あるいは集団に対して継続してなされてきたいじめや差別などのように、いわゆる犯罪として認知されにくいにもかかわらず、その被害者に言葉では言い表せないほどの深刻な傷を与える行為について、その被害者の感覚にできるだけ寄り添いつつ、それにもかかわらず、それを理解できたということさえ、もしかすると驕りにあたるかもしれないという予感を抱えながら考察し、実践していこうとするものである。そして、それは、啓蒙主義の、現代における申し子としての

(3) 長井進『犯罪被害者の心理と支援』（ナカニシヤ出版、2004年）第12章参照。

(4) この表現は、RJ論者にとっては違和感のあるものかもしれない。RJは、しばしば、次のように主張されてきた。つまり、近代を超克するもの・ポストモダンの理論・実践である、あるいは近代以前の実践の再生である、などである。しかしながら、このような議論は、近代がもたらした人権や法の支配などの思想を軽視することにつながりかねない。もちろん、RJの出発点にあった意識を共有する者たちについては、熱狂のあまり実際の帰結に目を瞑らないの

RJの姿⁽⁴⁾を明らかにすることに他ならない。

ところで、このRJの体現する啓蒙主義、その自省の機能をよりよく発動させるためには、RJの思想的側面と技術的側面の双方を整理し、両者の意識的な連動を試みる必要がある。そして、このことは、非常に図式的な整理をするのであれば、RJの技術に携わる者とRJの思想に携わる者の双方に次のような作業を要請するであろう。それは、つまり、RJの技術に携わる者には、その実証的な検討および思想に携わる者との対話を、そして、RJの思想に携わる者には思想としてのRJについてのより真摯な追求と、それを踏まえた上での技術に携わる者との対話を、である。

このうち、思想としてのRJについてのより真摯な追求ということは特に強調されなければならない。実践から生じてきたという、RJ固有の事情だけが問題であるのではない。そもそも思想や理論ということに対して、一方で軽視ないし軽蔑、他方で何かブランド品でも眺めるような取り扱いという、ひどく矛盾した態度がとられるのは、我々がよく目にするところである。そして、もっとも驚かされるのは、一般に理論家と目される人々の中にも、このような態度を維持している者がなきにしもあらずのように見えるという事実であろう。問題の根は誠に深いところにあるのかもしれない。

しかしながら、思想ないし理論というものが世界を様々な角度から見せてくれる言葉の道具であるとしたら、どうであろうか。言葉は世界から生じるものであるが、同時に我々に世界を見せてくれるものでもある。そし

であれば、意図するところにおいては問題ないといえるであろう。もともと、RJは、自由・平等を重んじる文脈の中から生じてきた。しかしながら、その根を共有どころか、理解すらしない者については、どうであろうか。筆者は、このような懸念だけではなく、そもそもRJの生じてきた文脈を大局的な視点から捉えるという問題関心から、RJは啓蒙主義の核心部分の体現であると主張する。この問題については、詳しい検討は、別稿の課題としたいのであるが、本稿においても取り組まれるものであるし、また、拙稿「ポストコロナル・リベラリズムと自由主義的政治理論・刑罰論の再構成：Iversonの政治理論・刑罰論の検討」比較法学第40巻第2号（2007年）168-173頁参照。

て、思想ないし理論は、この言葉のもつ力を極限にまで、研ぎ澄ますものであろう。ゼアのレンズの比喻を借りるのであれば、それはカメラのレンズを加工し、磨き上げるものである。人は、眼鏡をかけたり、あるいはファインダーを通して、世界を見る。実体験が複雑なのは、人が一度にいくつもの眼鏡を同時にかけたり、あるいは部分的に重ね合わせたりしながら、もしくは眼鏡だけでなく、カメラや集音マイク、風速計、温度計などといった様々な道具を用いながら、世界を見、そして感じようとするためである。あるいは、そのように世界を肌で感じ取りながら、同時に火や鋏などを用いて世界を加工しようとするからである。理論ないし思想の役割は、これらの様々な道具の性能や組み合わせによって生じる効果を明らかにすることにある。それは、究極的には実体験の重要性から離れることは許されないものだとしても、同時にそれに溺れることも許されていないものなのである。

本稿は、南アフリカ真実和解委員会 (Truth and Reconciliation Commission of South Africa : 以下、TRC と表記) の実践、そして広く体制転換後の南アフリカの試みを修復的正義という観点から擁護し、同時に検証していこうとしているヴィラ・ヴィッセンシオ (Charles Villa-Vicencio) の議論の全体像を、とくに修復的正義の観点から粗描し、検討しようとするものである。ヴィラ・ヴィッセンシオは、南アフリカで白人として生まれ育ち、メソジスト派の牧師となった人物である。彼は、かつてケープタウン大学で神学を教えており、TRC には、研究部長として参加、1998年にマンデラ (Nelson Mandela) 大統領に提出された最終報告書の監修にあたった。そして、その後、TRC の活動を引き継ぐ、「南アフリカ、正義と和解センター」⁽⁵⁾ の常任理事に就任している。この間、一貫して彼は、TRC や南アフリカそれ自体の試みの本質を、世界に向けて問いかけ続けてきた。この点で、彼を、名誉革命というイギリスの文脈における試みを世界

(5) このセンターについては、<http://www.ijr.org.za/about> を参照。

史的な出来事にまで高めたロック（John Lock）になぞらえることも、あながち間違いとはいえないように思われる。

このTRCに関しては、ともすれば理想主義的な主張、あるいは逆に現実主義的妥協という側面が目についてしまうかもしれない。しかしながら、そのTRCの試みが単なる理想主義あるいは現実主義のそれではなかったことは、ヴィラ・ヴィッセンシオの議論を見れば明らかである。もっとも、ヴィラ・ヴィッセンシオの修復的正義の議論は、非常に荒削りであるといえなくもない。神学においてはともかく、少なくとも修復的正義論に限っていうならば、彼の文章から、精緻な議論を見出すことは期待できそうにない。しかしながら、その根、その戦略的思考において、彼の議論は日本のRJ論者あるいはその批判者にさえ、示唆を与えるものがないとはいえないように思われる。それは、荒れ果てた国土と人心を前にしての、強靱な人道主義の理念と狡知である。

ヴィラ・ヴィッセンシオの議論については、すでに日本においても、紹介やその背景の検討などが無いわけではない⁽⁶⁾。しかしながら、とくに修復的正義の立場から、上記のような一連の問題関心のもとに、今一度包括的な検討を加えることも意味のないことではないように思われるのである。

以下においては、まず第二章において、ヴィラ・ヴィッセンシオの修復的正義の議論を概観する。次に、第三章において、彼の修復的正義論の背景にある神学的議論を概観する。そして、最後に、第四章において、若干の検討をしていくことにしたい。

(6) 津富宏「第35章 南アフリカ共和国」細井洋子ほか編著『修復的司法の総合的研究』（風間書房、2006年）523頁、阿部利洋『現代南アフリカにおける和解の問題：紛争後社会に関する宗教社会学的考察』平成15年度京都大学大学院文学研究科課程博士論文、174-176頁などを参照。

二 修復的正義の理念と狡知——ヴィラ・ヴィッセンシオの修復的正義論について——

本章においては、サリバン (Dennis Sullivan) とティフト (Larry Tift) 編集の *Handbook of Restorative Justice: A Global Perspective* に収録された論考⁽⁷⁾ を中心としつつ、他の論考⁽⁸⁾ における議論を補いながら、ヴィラ・ヴィッセンシオの修復的正義論を概観していく。本来であれば、議論の背景たる南アフリカの歴史や TRC の概要について概観すべきであろうが、それらについてすでに様々な文献が存在するため⁽⁹⁾、そちら

(7) See Charles Villa-Vicencio, “Transitional justice, restoration, and prosecution,” in Dennis Sullivan & Larry Tift, *Handbook of Restorative Justice: A Global Perspective* (London, New York: Routledge, 2006) pp387-400 (以下, TP と表記).

(8) See Charles Villa-Vicencio, “The Politics of Reconciliation,” in Tristan Anne Borer (ed.), *Telling the Truths: Truth Telling and Peace Building in Post-Conflict Societies* (Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press, 2006) pp59-81 (以下, PR と表記); id., “Reconciliation,” in Charles Villa-Vicencio & Erik Doxtader, *Pieces of the Puzzle: Keywords on Reconciliation and Transitional Justice* (Cape Town: Institute for Justice and Reconciliation, 2004) pp3-9 (以下, R と表記); id., “Restorative Justice in Social Context: The South African Truth and Reconciliation Commission,” in Nigel Biggar (ed.), *Burying the Past: making peace and doing justice after civil conflict expanded and updated* (Washington, D. C.: Georgetown University Press, 2003) pp235-50 (以下, SC と表記); id., “Restorative justice: dealing with the past differently,” in Charles Villa-Vicencio & Wilhelm Verwoerd (eds.), *Looking Back Reaching Forward: Reflections on the Truth and Reconciliation Commission of South Africa* (Cape Town: University of Cape Town Press, 2000) pp68-76 (以下, RD と表記); id., “Getting on with life: a move towards reconciliation,” in *Looking Back Reaching Forward*, pp199-209 (以下, GR と表記).

(9) 高橋文彦『「南アフリカ真実・和解委員会」と「東ティモール受容・真実・和解委員会」: 二つの民族和解と修復的正義(司法)に関する考察』ジュリスコンサルタス16号(2007年)45-51頁, 阿部・前掲論文(注6), 宇佐美誠「真実がもつ力: 南アフリカの真実和解委員会」中京法学第34巻第1・2号(1999年)79-90頁, 峯陽一『南アフリカ: 「虹の国」への歩み』(岩波新書, 1996年)

に譲ることにしたい。

以下においてみるように、ヴィラ・ヴィッセンシオの議論もまた、応報的正義と修復的正義を対比するところから始まっている。しかしながら、そのような図式を踏まえつつも、彼の視線はより広い地平へと注がれているのである。

以下、ヴィラ・ヴィッセンシオの議論の展開の順序に従いつつ、概観していく。

1 TP における議論

(1) 正義の追求⁽¹⁰⁾

ヴィラ・ヴィッセンシオの議論は、まずは、自由刑を中心とする刑罰の効果についての従来の想定に対して、世界的な再犯率の高さが示唆することを問うところから始まっている。ヴィラ・ヴィッセンシオによれば、この再犯率の高さは、刑罰に依拠する刑事司法システムが抑止や矯正の道具として十分なものではないということを物語っているとされる。そして、彼は、とくに政治的な抗争における刑罰の意義を問題にしている。

政治的抗争の文脈においては、刑罰は効果的な道具ではない。政治的なイデオロギーによって鼓舞されている者たちにとって、刑罰は何の効果ももたらさないのである。それどころか、ヴィラ・ヴィッセンシオによれば、刑罰はむしろ、政治犯に恩恵を与えてしまうとされる。それは、政治的な行動の結果、処罰に付された者を殉教者にするという恩恵である。このような事態は、政治的な抗争の文脈において、よく見られることであろう。南アフリカの文脈においても、体制に抵抗し、投獄されたマンデラ

などを参照。および、See Charles Villa-Vicencio and S'fiso Ngesi, 'South Africa: Beyond the "Miracle";' in Erik Doxtader and Charles Villa-Vicencio, *Through Fire with Water: The Roots of Division and the Potential for Reconciliation in Africa* (Claremont, South Africa: David Philip, 2003) pp266-303.

(10) TP, pp388-9.

が、国内的にも国際的にもアパルトヘイトへの抵抗の象徴となったことはよく知られていることである。

もちろん、だからといって、ヴィラ・ヴィッセンシオが刑事司法システムの必要性を否定してしまうわけでは、全くない。それは必要最小限のものとして存在することが前提とされている。しかしながら、「より多くのものが要求されている⁽¹¹⁾」。それは、全体論的正義論 (a holistic theory of justice) によって要求されるものなのである。それでは、それは一体、何なのであろうか。

ここで、ヴィラ・ヴィッセンシオは、1950年代のフラー (Lon L. Fuller) とハート (H. L. A. Hart) による法と道徳をめぐる議論に言及している。その際、彼は、フラーの議論、そしてその路線を引き継ぐ者としてドゥオーキン (Ronald Dworkin) の議論を高く評価している⁽¹²⁾。それは、フラーたちの議論が法の道徳性という次元に人々の注意を促すことによって、次のことを示唆するからである。つまり、法、ひいては国家というものは、正当性を有していなければならない、しかもこの正当性は、単なる手続的なものに止まらず、実質的なものでなければならないということを、である。ここで、実質的というのは、国民ひとりひとりに対して道徳的な呼びかけの力を持ち得るということである。もっとも、道徳的といっても、妻は夫に絶対服従すべしなどというような類のものでないことは言うまでもないであろう。ヴィラ・ヴィッセンシオがフラーたちの議論を引き合いに出しつつ問題にしているのは、あくまでも人道主義のものとしての道徳である。そして、さらに注意すべきことは、この道徳が単なる理念的なものにとどまらず、人々の物質的な欲求にまで応答するものであるということである。それは、移行期の社会が抱える諸々の課題についての、ヴィ

(11) TP, p388.

(12) もっとも、それが条件付のものであることは、See Charles Villa-Vicencio, *A Theology of Reconstruction: Nation-building and human rights* (Cambridge: Cambridge University Press, 1992) p97.

ラ・ヴィッセンシオの言及から明らかである。

ヴィラ・ヴィッセンシオによれば、移行期の社会の課題は次のようにまとめられることができるとされる。つまり、「人権侵害の再発を予防し、被害者の尊厳と物質的福利を回復させるための基盤として、共存および以前の敵との関係の修復を最優先させる⁽¹³⁾」ことである。この具体的内容は、さらに次のようにリスト化されている。つまり、第一に、際限なき復讐の代替としての応報的正義の実現、第二に、残虐行為の抑止、第三に、補償を通じての被害者・サバイバーの損失の回復、第四に、配分を通じての過去の不均衡の是正、第五に、いかなる国家においても矯正されない加害者と共に生きていくことは困難であるということを念頭におきつつ、加害者の要求と同様に、被害者・サバイバーのニーズに応答しながらなされるものとしての加害者の矯正、第六に、人権の文化を創設するための基盤としての、人間の尊厳の確約、第七に、国家によって、および／あるいは、そのコミュニティ内部において、誤って訴追された人々の免責、第八に、紛争に関ったすべての当事者たちが共に生きていくことができる道を見出そうとすること、などである。

移行期の社会においては、司法システム自体が機能していないこともめずらしいことではない。たとえ、枠組みは維持されていたとしても、権威主義的な体制のもとで培われた土壌をそのまま引き継いでいることもまれではない。そして、問題は司法システムの機能不全に止まらない。移行期の社会は、権威主義のもとで発生し、助長されてきた経済的停滞や政治的分断といった、あらゆる負の遺産を抱えたままである。そこでは、復讐の念に後押しされた応報的正義の貫徹は不可能であるというだけではないのである。それは、紛争の再燃による秩序崩壊をもたらし、さらなる不正義の状況を出現させかねない。それゆえ、移行期の社会においては、極端な応報的正義は、それ自体が不正義であり得るのである。したがって、とに

(13) TP, p388.

かく盲目的に加害者を処罰するというのではなく、加害者が「新しい秩序の、積極的で、成熟していて、かつ創造的な構成員 (active, full and creative members of the new order)⁽¹⁴⁾」となるようにしなければならないのである。

もちろん、だからといって、過去の不正義に目を瞑り、前を向いていけというのもまた、現実的な主張とはいえない。もし、過去の人権侵害が不正義として認められず、被害者・サバイバーに対して何らかの補償がなされないのであれば、これもまた社会を不安定化させる要因となり得る。ヴィラ・ヴィッセンシオは、移行期社会における修復的正義の課題を、「応報が失敗したところで成功を取めることができるかどうか⁽¹⁵⁾」という非常に厳しいものであるとしている。

(2) 応報的正義と修復的正義⁽¹⁶⁾

さて、既述のごとく、ヴィラ・ヴィッセンシオもまた、「応報的正義 対 修復的正義」という図式から出発している。しかしながら、このことは、彼が応報的正義、つまり刑罰を使つての犯罪者への対応ということに否定的事であることを意味しない。それどころか、ヴィラ・ヴィッセンシオは、応報的正義と修復的正義の両方が必要であるとしている。

ヴィラ・ヴィッセンシオの、この議論は、「応報的正義 対 修復的正義」という定式を慎重に検討した上でのものとは言い難いように思われる。もっとも、ここで私は、彼の議論の展開の仕方について、あれこれ言うつもりはない。彼の目の前には、南アフリカの文脈が歴然として横たわっているのであり、彼の関心は、もっぱら、この中でもがき苦しむ人々をいかに救済するかということにある。このような理論の展開の仕方についてのヴィラ・ヴィッセンシオなりの背景については、次章においてみていくこと

(14) *TP*, p389.

(15) *Id.*

(16) *TP*, pp389-91.

になる。そして、筆者なりの観点からの検討は最後の章にゆずることにしたい。ここでは、ただ、このヴィラ・ヴィッセンシオの視点は、応報的正義と修復的正義を、どちらかといえばすどく対立するものとして捉えていた、初期のゼアのそれであるよりも、両者を連続体の両極に位置するものとして、より分析的な思考モデルのように捉える、近年のゼアのそれ⁽¹⁷⁾に近いということを指摘しておくに止めたい。そして、ヴィラ・ヴィッセンシオが、とくに修復的正義の立場に立ちながら応報的正義と修復的正義の両方が必要だとする、その根拠論へと目を向けるのであれば、それは次のようなものであることがわかるのである。つまり、移行期社会の文脈において社会契約 (social contract) という概念を真摯に受け止めることの不可避性である。これは、どういうことを意味しているのだろうか。

ヴィラ・ヴィッセンシオは、まず、移行期社会において法の支配を再建することの必要性を主張している⁽¹⁸⁾。移行期社会においては、国家も、そこでの法の支配も、いまだにその存在を脅かされている状態にある。ここでは、いまだに旧体制下での腐敗の構造が払拭されていない。それだけでなく、国家自体がいつ何時、旧勢力による反乱や新体制を形作っている諸勢力の間での内紛によって瓦解するかわからないのである。そのような体制崩壊を導く因子は、人々の不公平感から生じてくる。それゆえ、法の支配が実質的に確立され、すべての国民が公平に扱われているという実感がもてるようにならないのであれば、旧体制下での被害者・加害者、そしてコミュニティの間での協調による永続的な平和など、望むべくもない。そして、同時に、これらの三者の間での協調がないのであれば、法の支配の確立も望めないのである。それでは、この協調および法の支配をもたらすためには、どのようなことが意識されなければならないのであろうか。

(17) ハワード・ゼア (西村春夫ほか訳) 『修復的司法とは何か』 (新泉社, 2003年) 日本語版序文参照。

(18) *TP*, p390.

ここにおいて、ヴィラ・ヴィッセンシオは、社会契約という古い概念に、新たな生命を見出すのである⁽¹⁹⁾。それは、不当な過去と一連の理想によって形作られる未来との間 (between an illegitimate past and a future shaped by a set of ideals) に位置する移行期社会にとって、錆付き、埃にまみれたガラクタであるどころか、まさに自分たちが取り組んでいる課題そのものなのである。既存の民主主義諸国は、国家の正当性と持続可能性を生み出す実践、価値、行動形式などを長年にわたって獲得している。これに対して、新生の民主主義諸国は、その正当性を一から築き上げなければならないのである。新生民主主義国家においては、その法、それに基づく決定、その執行などの、国家活動のすべてがすべての国民にとって納得のいくものでなければならない。もし、国民のうちの、一部の層が、自分たちは排除されていると感じて、国家形成のプロセスに背を向けるのであれば、そこから崩壊の根が広がっていつてしまう。そのような事態を回避するためには、すべての国民に対して、社会契約のプロセスへと積極的に参加するように促すことが不可欠である。しかしながら、ここで次のような問題が生じてくる。それは、つまり、とくに、いままで虐げられ、搾取され、貧困と侮蔑と生命・身体への脅威に耐えてきた人々が、いきなり、国家形成のプロセスに、つまり社会契約の実質的なプロセスに、安心して、かつ積極的に参加することができるようになるのかという問題である。

確かに1994年の南アフリカの総選挙には、白人だけでなく、多くの黒人が参加した。それは、歴史的な光景であったといえるであろう。だが、社会契約の実践は、選挙に参加することに限られない。それは、市民が自由に意見を出し合い、情報を交換し、政府の活動を絶えず検証し、様々な政治的活動に進んで参加していく、などといった一連の行動すべてを含むものなのである。これらの活動が行われず、ただ単に選挙が行われ、憲法を

(19) *Id.*

筆頭とする諸々の法が制定されたというだけでは、社会契約が実現されたということとはできない。それは、移行期の社会にとって、長い年月と途方もない忍耐を要するプロセスなのである。これを実現するためには、上の問題は、どうしても解決されなければならない。それでは、この問題はいかにして解決することができるのであろうか。この問題に向き合う時に、修復的正義の立場に立ちながら、応報的正義をも必要不可欠なものとして捉えるべき根拠が生じてくるのである。それは、一体どういうことであらうか。

いままで貶められ、搾取され、虐げられてきた人々が、新たな国家を安心なもの、さらには公平なもののみなすことができるようになるためには、次のことが実現されなければならない。つまり、彼らの怒りおよび復讐感情が、傾聴され、自然なもの・正当なものとして認められることである。

逆に、もし、彼らの感情、生の記憶、感慨、印象などといったものが頭ごなしに否定されるのだとしたら、そのような社会は彼らにとって信頼するに値するものであろうか。例えば、次のような場合はどうであらうか。すなわち、彼らの感情に配慮することが、政策的な観点からみてコストの高いものであるから無視ないし押さえ込もうとするような場合。あるいは、赦すことこそが気高い行為であるから、怒りや復讐感情を顕にするような者に対しては、無視ないし道徳的な非難を浴びせるといったような場合。これらの事柄が平然とまかり通るような体制を、これまでの被抑圧者は支持するだろうか。

もちろん、これまでの体制があまりにもひどいものであり、そこでの被抑圧者が信頼に値するか否かという次元の問題ではなく、とにかく国家権力による（あるいはその名を借りた）、あからさまな生命・身体・財産への侵害が起らないような体制であればよいと願っているという側面もあるであらう。ヴィラ・ヴィッセンシオも、南アフリカの文脈において、このような意識の動きが存在するのを感じ取っていたであろう。それを、新体

制の安定の基盤のひとつとして最大限に利用するということは、政治的賢慮に基づく計らいとして当然、なされるべきであろう。しかしながら、その計らいには、これまた当然、限界が存在する。あきらめというのは、状況をもたらすものであり、状況の変化によって感情ないし欲求がより多くのものを求め始めるといふことはあり得る。政治や国家自体へのあきらめは、状況の多少なりとも「改善」に従って、真の改善への欲求・新体制への不満の爆発へとつながる、ないしは道を明け渡すこともあり得るのである。あきらめ自体が限定的な現象であることは、1994年の総選挙がよく示している。そこでは、「あきらめていたはず」の人々が白人右翼による爆弾テロをものともせず投票所の前に列をつくったのである。さらに、体制の消極的な肯定は、結局のところ、体制の腐敗を促進する。人間は、権力を欲し、そして、たとえ欲していなかったとしても、権力を得れば必ず腐敗する。これは、人間への不信感の表明ではなく、人間の本性に関する透徹した認識の一部である。そうであるとするならば、その権力によって抑圧された人々の声を簡単に無視し得るような体制とは、結局のところ、旧体制と本質的に同じものであり、状況の「改善」も一時的・表面的な現象にすぎないのではなからうか。

ここにおいて、社会契約の真正な遂行のために、応報的正義をも重んじるべき理由が明らかになってくるであろう。新生民主主義国家は、自らの公平性をすべての国民、とくに旧体制下において被抑圧者の地位にあった国民に示し、彼らの参加を促進することによって、自らの正当性を確立しなければならない。このためには、旧体制下での人権侵害が悪であったことを確認し、被害者・サバイバーの声に真摯に耳を傾け、そして、悪への公的非難をしっかりと行わなければならない。この公的非難ということの重要性を、修復的正義も忘れてよいわけでは、全くない。それは、「回復／更生の基礎 (a basis for restoring/rehabilitating those victims of past abuse as well as those responsible for their suffering)⁽²⁰⁾」である。そして、この公的非難ということこそ、応報を野放図な復讐感情から区別するもの

である。公的非難は、怒りや復讐感情を受け止めつつ、さらに先に進もうとする。そこでは、「これらの感情は、手続的に制御され、むき出しの復讐心へと還元されないことが確実にされるように、創造的に仕向けられる必要がある⁽²¹⁾」ということが認識されている。この点において、修復的正義と応報的正義は、協調関係にあるのである。

(3) 修復された社会の建設⁽²²⁾

以上の、移行期社会における応報的正義と修復的正義の議論を踏まえた上で、ヴィラ・ヴィッセンシオは、移行期社会において果たされるべき4つの責務について言及している。それは、第一に、悪事への公的非難 (the condemnation of evil) であり、第二に、被害者の回復 (the restoration of victims) であり、第三に、加害者の更生 (the rehabilitation of perpetrators) であり、そして第四に、社会秩序の修復 (the restoration of the social order) である。以下、順にヴィラ・ヴィッセンシオの議論を追っていくことにしたい。

(i) 悪事への公的非難

まず、ヴィラ・ヴィッセンシオは、応報が復讐と区別され、道徳の確証を含むものであるという議論を再度展開しつつ、ニーノ (Carlos Santiago Nino) の議論を全面的に引き合いに出している⁽²³⁾。その議論から読み取れることは、ヴィラ・ヴィッセンシオは、ニーノを純正な意味での応報論者 (つまり、復讐と応報との区別を自覚している論者) と理解し、また、その熟議民主主義論を社会契約論という形で理解して、自らの議論との間に親近性を見出しているということである。この点に、若干ズレがないわけ

(20) TP, p391.

(21) *Id.*

(22) TP, pp391-9.

(23) ニーノの政治理論・刑罰論については、拙稿「熟議民主主義と復讐の超越：Ninoの政治理論・刑罰論とアルゼンチンの悲劇」比較法学第40巻第1号(2006年)41-90頁参照。

でもないように思われるが、それはともかくとして、ヴィラ・ヴィッセンシオによるニーノの社会道徳 (social morality) ないし共通善 (common good) の概念、自律性 (autonomy) および社会的責任 (social responsibility) の概念への注目は興味深いことであるといえよう。

確かに、この二人の論者は、議論を展開した背景において共通しているだけでなく (一方はアパルトヘイト体制崩壊後の南アフリカ、他方は軍事政権崩壊後のアルゼンチン)、真に民主主義的な体制をもつ国家を構成する要素は何かという点で、近しい議論を展開している。それは、つまり、市民による社会契約の実質的なプロセスへの真摯な参加の推奨であり、そのプロセスを支配し、また、そのプロセスを通じて確証されるところの、人権などの諸価値に対する信念であり、そして、諸価値に統制され、市民の真摯な参加に支えられたプロセスから生じてくるどころの社会道徳の尊重である。

ここで、ヴィラ・ヴィッセンシオは、多少錯綜した議論を通じて、以下のことを確認している。つまり、第一に、悪事への公的非難において目指されているのは、善き秩序の修復と共通善の促進 (the restoration of good order and the promotion of the common good) であるということ、第二に、その際、被害者と加害者は、道徳的主体として尊重されるということ、第三に、それゆえに、加害者には、悪事によって被害者に生じた精神的・物質的害を修復するという社会的責任が生じること、第五に、公的非難の方法は刑罰に限られず、赦しなどを用いる余地も存在すること、などである。

これらに加え、ヴィラ・ヴィッセンシオのリアリスティックな姿勢を示すものとして、とくに注目に値するのは、次の点である。つまり、第一に、加害者が自発的に行動するなどということは、ほぼあり得ず、修復的な手法は、アメを与えつつ、法的に課されなければ成功しないこと、第二に、修復的な手法こそが社会の安定に資すること、などである。

(ii) 被害者の修復

被害者の修復にとって、その怒り・復讐感情への配慮に基づく公的非難が重要であることはもちろんであるが、ヴィラ・ヴィッセンシオによれば、それだけでは足りないとされる。被害者の修復には、補償が不可欠なのである。精神的な側面ばかりが強調されたところで、腹が膨れないのであればどうしようもない。失われた財産が取り戻され、侵害のおかげで損なわれた家計がどうにかされるのでなければ、修復などあり得ないであろう。

もっとも、ヴィラ・ヴィッセンシオのいう補償 (reparation)⁽²⁴⁾ とは、必ずしも金銭的なものに限られないものようである。それは、カウンセリングや制度改革、民主化までも含むとされる⁽²⁵⁾。そして、被害者もまた、この修復のプロセスに積極的に参加するの でなければならぬとされるのである。論じられるべきは、「大規模な人権侵害の被害者へと、視点を狭く限定することを超えて、補償を受け取るに値する者へのアクセスの仕方やどうすれば補償がもっともよく行われるかということについての、よりシステムティックな見方⁽²⁶⁾」について、である。そして、そのような視野の中心には、常に関係構築 (relationship-building) の視点がなければならない。被害者が自分が抱えた害のみの修復に固執するのであれば、社会は修復されず、結局、被害者自身の修復さえも達成されないままに終わってしまう。そして、社会の修復には、経済的な変革が必要なのである。

この経済的変革について、ヴィラ・ヴィッセンシオは、「持続可能な平和と経済的変革との間の内的関係は、どの成功した修復的正義プロセスにとっても、中核的な (central) ものである⁽²⁷⁾」とさえ、述べている。そし

(24) この概念について、宇佐美誠「過去を繕う：人権侵害補償の道徳的機能」中京法学第39巻1・2号(2004年)11-14頁参照。

(25) *TP*, p394.

(26) *Id.*

(27) *TP*, p395.

て、ここでもまた、必要とされるのは、一般市民の力、それも「将来の活動を計画するために、当面の生存を超えて、さらにその先をみるという、一般市民の力⁽²⁸⁾」なのである。このような力こそが、法の支配のもとにあり、長期的な視野に基づく諸政策を練り上げ、実施することのできる国家を創り上げ、持続的な平和をもたらし、そして経済成長を可能にする。この平和と経済成長との関係について、ヴィラ・ヴィッセンシオは、国連文書を引き合いに出しつつ、論じている。

もっとも、ヴィラ・ヴィッセンシオも、経済が成長すれば、被害者が癒され、修復されると述べているのではない⁽²⁹⁾。ヴィラ・ヴィッセンシオは、ただ単に、社会に、被害者に対してカウンセリング、職業訓練、職業の斡旋などといった、様々なサービスを提供できるだけの資源がないのであれば、いくら修復を論じても無駄であるという、ある意味で当然のことを述べているのである。そして、そのような力をもつ社会を構築するために、何が必要かを論じているのである。

(iii) 加害者の更生

上記の、経済成長への視線などと同じく、否、それ以上に端的に、ヴィラ・ヴィッセンシオのリアリストとしての立場をよく表しているのが、この加害者の更生・再統合についての彼の見解であるといえる。ヴィラ・ヴィッセンシオによれば、加害者の更生・再統合は非常に困難な課題であるとはいえ、これが達成されなければ被害者の修復も不可能であるとされる⁽³⁰⁾。なぜなら、加害者が新体制に不満や不信をいだき、隙あらばこれを転覆しようと様子を伺っているような状況では、法の支配や経済発展、それによる社会的資源の増加、それらを通じての被害者の修復などということは夢物語と化してしまうからである。加害者は、依然として強者なのである。もっとも、修復的正義を通じての加害者の更生・再統合といって

(28) *Id.*

(29) *Id.*

(30) *Id.*

も、それには程度の差というものが存在する。私の体を傷つけ、財産を奪い、親や兄弟、友人や親戚の命を奪ったあいつ等を、何故、赦さねばならないのか、被害者から怒る権利すら奪い取ろうというのか、という、至極当然の批判⁽³¹⁾に対して、そうではないということが説明されなければならないであろう。そして、ヴィラ・ヴィッセンシオは、政治的和解 (political reconciliation) という概念を主張するのである。

政治的和解とは、宗教的な和解・謝罪・癒しなどの概念とは、明確に区別されるものである。宗教的な和解においては、かなり親密な (intimate) 関係の構築というものが目指される。そこにおいては、被害者も加害者も互いに共感 (empathy) を抱きあい、謝罪 (apology) や赦し (forgiveness) を通じて、当事者が心の底から納得したと感ずることのできる、真の解決が目指されるのである。これは、非常に私的なもの (deeply personal) である⁽³²⁾。これに対して、政治的和解においては、このような共感や赦しなどは、贈り物 (gift)⁽³³⁾ であるとされる。それは、政治的和解よりも、もっと多くのものを要求している。それは、政治的和解と異なるだけでなく、相容れないものでさえあり得るのである⁽³⁴⁾。それでは、政治的和解においては、何が目指され、何が要求されているかということ、それは、次のようなものである。つまり、自己破壊的な関係 (self-destroying relationships)⁽³⁵⁾ を崩すために、過去を復讐心に満ちた視点から解釈するのをやめ、荒廃した国土と人心の修復のために何が必要かを考え、実践していくことである。これは、ただ一度きりの出来事ではない。政治的和解は、目標であると同時に、プロセスそのものである⁽³⁶⁾。それは、長い年月と多大な労力を必要とするものなのである。

(31) *PR*, pp71-2; *GR*, pp201-2.

(32) *GR*, p208.

(33) *TP*, p397.

(34) *Id.*

(35) *PR*, p70.

(36) *PR*, p60; *R*, p6; *SC*, p240, 248-9.

このような過程においては、私的レベルでの納得、赦し、癒しなどというものは別の次元で物事が進み得る。しかしながら、だからといって政治的和解のプロセスにおいて、個人の悲哀や怒りが置き去りにされてよいということにはならない。むしろ、それを無視してはならないということから、政治的和解の理念は出発している。しかしながら、そこで取り扱われるのは、単なる個人的な感情や心理ではなく、もっと精神的な (spiritual) ものなのである。それは、人間であろうとする意志 (the will to be human)⁽³⁷⁾ に関係している。ここで、「人間」という表現は、我々にとっては、誤解を招きやすいものであるかもしれない。むしろ、それは、「構成員」、あるいは「市民」「国民」などと表現した方が無用の誤解を招かないで済むかもしれない。しかしながら、単なる政治的・社会的文脈のレベルでの話に止まらず、人間存在の本質に関する思考が、この「人間」という表現の背景にあることも事実である。ヴィラ・ヴィッセンシオは、PR においては、これを *ubuntu* という概念に関係させている⁽³⁸⁾。*ubuntu* とは、アフリカ的な概念であるとされるものであり、一言でいうならば、人間を本質的に社会的な存在とみる見方のことである⁽³⁹⁾。ここから、人間と政治との切っても切れない関係が生じてくる。そして、さらに、人が「人間」であるためには、対話と互恵性 (dialogue and reciprocity)⁽⁴⁰⁾ を通じて、可能な限り、互いを尊重し合える秩序を創設しなければならない。したがって、「人間」は本質的に民主主義的な存在なのである⁽⁴¹⁾。政治的和解は、この「人間」によって進められ、同時に、この「人間」の誕生と活動を可能にするものである。それは、その社会の文脈に沿った現実的な

(37) PR, p61.

(38) これに関連する背景的な事情について、阿部・前掲論文 (注) 172-174頁参照。

(39) See Dani W Nabudere, "Ubuntu," in Charles Villa-Vicencio & Erik Doxtader, *supra* note 8, at pp10-6.

(40) PR, p61.

(41) PR, p62.

ものであると同時に、理念に支えられたプロセスである。この点において、政治的和解は、単なる平和共存というのとも区別される⁽⁴²⁾。単なる平和共存においては、とりあえず武器を置いて殺し合いをやめようということが目指されるのであるが、政治的和解においては、以上の記述から明らかかなように、それ以上のものが要求されている。そして、それゆえに、それは、「奇跡 (miracle)⁽⁴³⁾」とも表現され得るのである。

ヴィラ・ヴィッセンシオは、以上のような政治的和解の概念をもって、TRCの本質を説明しているのであるが、同時に、TRCの限界についても言及している⁽⁴⁴⁾。それは、TRCの実践によって、アパルトヘイト体制下での大規模な人権侵害が、あたかも一部の異常者によって引き起こされたかのような概観を呈してしまったことである。ヴィラ・ヴィッセンシオは、ニーノと同様に、アーレント (Hannah Arendt) の「悪の陳腐さ」の概念に着目している。かつての悲劇は、一部の異常者どころか、平凡な兵士や官僚や、あるいは一般市民によって引き起こされたのである。例えば、家に帰れば、優しい夫であり、よき父であるような人物が、「敵」に対しては血に飢えた獣か、血も涙もない機械のように振舞っていたのである。中には人種主義的なイデオロギーに鼓舞された者もあったかもしれないが、大半の人々は、日常生活の一部として虐殺・虐待を行っていたのである。人はそのような、一見すると矛盾した振る舞いを行うことができる存在なのである。人は天使にも悪魔にもなり得るというのでは足りない。人は、天使であると同時に、悪魔であることができるのだ。この事実が明らかにされるのでなければ、再び大規模な人権侵害が勃発するのを回避することは、絶対にできないであろう。しかしながら、TRCは、一部の者に焦点をあてることによって、かつての悲劇を、ごく私的なものであるかのように錯覚させてしまう側面がなきにしもあらずなのである。ヴィラ・

(42) GR, p208.

(43) PR, p75.

(44) TP, p396. もっとも、GR, pp203-4.

ヴィッセンシオは、各自の内面に潜む悪の可能性を認識することの重要性を主張している⁽⁴⁵⁾。

(iv) 社会秩序の修復

以上のような議論は、あくまでも人権に基づく正義の貫徹を重んじ、加害者の厳正な処罰を求める者にとっては、矛盾に満ちたものとして受け止められるであろう。ヴィラ・ヴィッセンシオは、そのような意見に一定の理解を示しつつ、社会秩序の修復がもたらす利益と、そのために政治的手腕 (statecraft) の果たす役割を重要視している。

もっとも、ヴィラ・ヴィッセンシオも、政治的移行が実現した現状においても、社会的・経済的矛盾が山積していることを無視するわけではない。しかしながら、これらの矛盾は一朝一夕で解消され得るものではなく、それが徐々にでも減少していくためには、やはり平和が維持されていなければならない。そのためには、やはり私的な修復のみではなく、それに配慮しつつも社会秩序の修復という視点を欠かすことはできないとするのである。

以上が、ヴィラ・ヴィッセンシオの修復的正義論の概要である。

2 小括——「はかりごと」をする理想主義——

ヴィラ・ヴィッセンシオの修復的正義論は、一見すると過酷なまでに現実主義的で、悪くすれば国家再建のための被害者利用論にすぎないものであるかのように見えるかもしれない。政治的和解の概念においては、もはや個人々の怒りや悲哀は「問題にされていない」ようにも見える。それは、厚かましくも、過去を忘れて、国家建設のために積極的に働けと号令しているかのようにさえ、見えてしまうかもしれない。

しかしながら、ヴィラ・ヴィッセンシオの修復的正義論を貫くものは、単なるリアリズムだけではない。彼の理論の真の支柱は、非常に理念的・

(45) *TP*, p396.

理想主義的なものである。それは、次のようにまとめることが可能であろう。つまり、それは、「永久に不完全なものでしかない現世において、『人間』と『獣』の部分不可避免的に抱えつつ生きていかざるを得ない人という存在を、どのようにしたら、最大限、『人間』として尊重することができるか」というものである、と。

この理念の中には、すでに人と現実世界に対する冷徹な洞察が刻み込まれている。それは、人を愛することを望みながら、同時にそれが完全に実現されることはあり得ないことを骨の髄から味わっている者の苦々しい洞察である。それゆえに、ヴィラ・ヴィッセンシオの理想主義は、限りなく狡猾であろうとする。しかしながら、その狡猾さは、己の保身のためのものではない。それは、自らの限界を意識しつつ、来るべき未来に、人々を取り巻く状況が少しでも改善されることを信じている者の政治的賢慮である。

以上の事柄は、ただ単に、ヴィラ・ヴィッセンシオの世俗的な議論たる修復的正義論を見るだけでなく、彼の神学的な議論を検討することによって、より鮮明なものにすることができるように思う⁽⁴⁶⁾。したがって、次章においては、彼の神学における主著ともいえる『再建の神学』の内容を概観していくことにしたい。

三 神学と修復的正義論

1990年にマンデラが釈放され、新体制への移行に向けて交渉が開始される中で、ヴィラ・ヴィッセンシオの神学的な立場も一定の変容を経験した。それまでは、彼の思考の中核部分を、アパルトヘイトに代表される人種主義的な抑圧からの解放が占めていた⁽⁴⁷⁾。これに対して、状況の変化

(46) もっとも、後述するように、彼の修復的正義論が神学的議論に支えられていることは間違いないにしても、前者が後者に不可避免的に依拠しているとは正しくない。

の中で、単に自由や解放を唱えるだけでなく、どのようにして分断された社会を統合し、新たな道を歩んでいくべきについて考察することが考察されるべき緊急の課題として浮上してきたのである。すなわち、もっぱら No と主張する「解放の神学」から、Yes と述べる「再建の神学」への転換ないし進展である⁽⁴⁸⁾。

この転換ないし進展は、無論、南アフリカの文脈において遂行されたものである。しかしながら、ヴィラ・ヴィッセンシオの視野の内には、全世界の情勢が常に関連するものとして、存在していたことも確かであろう⁽⁴⁹⁾。

以下、ヴィラ・ヴィッセンシオの「再建の神学」論の全体像を粗描した上で、それと彼の修復的正義論との関係について若干見ていくことにしたい。

1 再建の神学について

(1) 基本的枠組み

(i) 人間観

ヴィラ・ヴィッセンシオの議論の中に一貫して流れている、透徹したりアリズムとあくなき理念の追求の双方を包含する理想主義の根底には、ある特定の間観が存在する。それは、次のようにまとめることができるであろう。つまり、「より気高い理想や温かいものを求めつつも、己の欲望や暴力性に、永久に囚われ続けたままであり、絶えず不安に駆られている存在としての人」という人間観である。

(47) See Charles Villa-Vicencio, *Civil Disobedience and Beyond : Law, Resistance and Religion in South Africa* (Claremont, South Africa : David Philip, 1990).

(48) See Charles Villa-Vicencio, *supra* note 12, at p1. もっとも、「再建の神学」は「解放の神学」とまったく別物であるというわけではなく、むしろ、その一種なのである。このことについては、後述する。

(49) *Id.*, pp2-3, 24.

これは、一見すると単なる悲観主義のように見えなくもない。しかしながら、ヴィラ・ヴィッセンシオにとって、このような人間観は、悲観主義あるいは一般にイメージされるところの性悪説などという次元に属するものではなく、むしろ人という存在を肯定した上での、不屈の人間観察の結果なのだということができるであろう。それは、彼の展開する、南アフリカの文脈（あるいは、あらゆる移行期社会に共通する文脈）を踏まえた上での修復的正義論から窺われることであり、『再建の神学』においては、マルクス主義の検討を行っている箇所⁽⁵⁰⁾に、端的に表されていることのように思われる。その箇所において、ヴィラ・ヴィッセンシオは、マルクス主義の有する、より平等な社会の実現を目指すという姿勢を肯定しつつ、その人間観の楽天性・浅薄さを批判しているのである⁽⁵¹⁾。

ところで、上述の人間観を、よりキリスト教的に表現するのであれば、「神の存在を求め、その言葉に耳を傾けつつも、己の罪 (sin) に永久に囚われたままであり、絶えず不安に駆られている存在としての人」ということになるであろうか。実際、ヴィラ・ヴィッセンシオは、人のもつ利己主義や暴力性、そして、その社会的な表れとしての構造的な差別、搾取などの問題を、罪という概念を用いて説明している⁽⁵²⁾。罪とは、ヴィラ・ヴィッセンシオによれば、「人と神、人同士、そして人々と、彼らがその本質的部分としての自然界との間の関係における異常形態を認定するために、聖書において用いられる記述的用語⁽⁵³⁾」と定義されるものである。

もっとも、このことは、ヴィラ・ヴィッセンシオが自らの人間観をキリスト教固有のもののみなしているということを意味しない。再建の神学といおうと、解放の神学と主張しようとして、ヴィラ・ヴィッセンシオの視野には常に、キリスト教徒だけではなく、様々な異教徒たちがいる。そして、

(50) *Id.*, pp224-30.

(51) *Id.*, p229.

(52) *Id.*, p162, 172-3, 229.

(53) *Id.*, p162.

ヴィラ・ヴィッセンシオは、常に、キリスト教徒だけでなく、これらの異教徒たちにも語りかけることを意図しているのである。彼は、人間存在の根底的な共通性を念頭に、その普遍的なあり方についての洞察を前提としているのである。それゆえ、ヴィラ・ヴィッセンシオの人間観がキリスト教的な背景を多分に有するとしても、その意図としては、すべての人の本質に関する洞察たることを前提としたものであることは間違いないであろう。そして、その意図は、あながち的外れのものとも言いがたいように思われる。ここでは、詳しく論じることはできないが、とにかくヴィラ・ヴィッセンシオの基本的スタンスの背景に、以上のような人間観が常に存在し、それが彼の議論の骨格を支えているということを確認した上で、先に進むことにしたい。

(ii) 理念的目標

もし、ヴィラ・ヴィッセンシオが、骨の髄まで性悪説の人であり、理念などというものは歯牙にもかけない論者であるとしたら、本稿において取り上げているような修復的正義論も再建の神学も、この世に登場しないままであっただろう。しかしながら、ヴィラ・ヴィッセンシオが、人に関して（そして、後に見るように政治に関して）、シャイな悲観主義者ではなく、強靱な観察者であり、実践者であるということは、上においてすでに見たことである。それでは、そのヴィラ・ヴィッセンシオが主張する再建の神学においては、基本的にどのようなことが目指されているのであろうか。

まず、1990年以降の変化がもたらした、教会やキリスト教徒たちの課題の変化について、ヴィラ・ヴィッセンシオは、次のようにまとめている⁽⁵⁴⁾。つまり、1990年以前には、抵抗 (resistance) のみが問題となっていたが、それ以後は、復活 (renewal) が問題になってきた、と。すなわち、それまではアパルトヘイト体制に抵抗し、そこから人々を解放するこ

(54) *Id.*, pp7-9.

とのみに関心が向けられていたのであるが、新たな体制の可能性が見えてくる中で、「約束の地」において現実と理想をどのように架橋していくかが問題となってきたのである。

このような課題に対処するためには、神学者は、それまでのように、政府の圧力に対して、Noを繰り返してをりさえすればよいというわけにはいかなくなる。むしろ、自らが主体となって、新たな体制の統治に参加していかねばならないのである。そのためには、ある程度ドロをかぶることも覚悟しなければならないであろう。かといって、既存の文脈と馴れ合って、単なる現状肯定主義に墮することは、決して許されないのである。それでは、どうすればよいというのであろうか。ヴィラ・ヴィッセンシオは、ここで、「解放する存在 (liberating presence)⁽⁵⁵⁾」としての神ということを強調している。

思えば聖書に描かれているユダヤ人の歴史は、捕囚 (exile) と解放 (liberation) の歴史であった。ただし、それは、ただ単にユダヤ人の経験であるのみならず、人類にとって象徴的な出来事である。つまり、そこには、原罪を背負う存在としての人間のあり方と神の働きの本質が凝縮されているのである。それは、次のようなものである。すなわち、人々は、常に罪の状態に囚われているのであり、そこにおいて神は、「常に新しく、常に驚かされるような、解放する存在の認識⁽⁵⁶⁾」として登場してくる、と。

ここで言及されている、神の新しさ・驚くべき姿ということについては、もう少し、詳しく見ていく必要があるであろう。ヴィラ・ヴィッセンシオの人間観によれば、人は、(理念を求めつつも) 罪に囚われ続けている存在であった。このことについて、さらに考えていくと、次のようなことが見えてくるであろう。つまり、人は、どれほど優れた人物であろうと、彼が属する文脈 (時代や地域・国家などのそれ) の制約から逃れ出ることは

(55) *Id.*, p25.

(56) *Id.*

できない。また、人は、どれほど優しい人物であろうと、他者と競争し、他者を押し除けることなしには生きていくことはできない。否、徹底した見方をするのであれば、もはや、私がここに、この場所に存在するという事実自体が何らかの罪を暗示しているといえるであろう。私が、この場所を占めているということ、それは、限られた空間の中で、もしかするとこの場所に来るはずだったかもしれない人を押し除けて立っているということの意味するのである。これは、次のような事実を省みるのであれば、明らかなことであろう。つまり、それは、人はひとりでに発生し、独りで成長し、霞を食べて生きていくような存在ではあり得ず、また自然も社会も、すべての人を物質的にも精神的にも十分に養えるほど、豊かであり得ないという事実である。このような現実の中で、人は、他人に依存し、彼らの技術や考え方を学び、ときには盗み取ることによって成長し、同時に他人を押し除けつつ、ときには食い物にしつつ、己の生存と社会における位置を維持していく。したがって、人の歴史は、常に罪の歴史でしかあり得ないものなのである。

しかしながら、そのような歴史の中にも奇跡と呼べるような瞬間が存在する。人は見ず知らずの他人のために、涙したり、そうしようと思っていなくとも、ふと食べ物を差し出したりすることがある。そもそも平等や人権などといった概念が登場してくること自体が驚異的である。別に平等でなくとも、自分さえよければそれでよいというのが人の本質であるはずである。それにもかかわらず、平等実現のための闘いがあり、それを支援する人々がいて、体制においては、形式的であるとはいえ、一応の平等を維持できるような枠組みが構築されているところが少なくない。

もっとも、これらの事柄を自己利益の側面から説明することは、十分可能である。例えば、ニーチェなどは、キリスト教も、平等や人権の実現を求めるあらゆる政治思想・運動も、少数の強者に対する、数的に圧倒的な多数者たる弱者のルサンチマンに支えられているとするであろう。みんなが強者になれるわけではない。なんでアイツだけがあんなに強く、そして

偉そうなのだ。でも、数的に言えばアイツは、所詮独りか、仲間がいてもせいぜい少数である。それならば、弱者たる我々が結託して、強者をやりこめればよい——このような見方は、かなり偏ったものであるとはいえ、それなりの真実を暗示しているであろう。実際、平等だの権利だのといっても、自分がそれらを必死に求めざるを得ないような境遇に置かれぬのであれば、人はそれらについて真剣に考えようとはしない。悪くすれば、それらを声高に主張する者を非難中傷したりもする。あるいは権利、権利といって他人を押しつけ、自分だけが利益を得ようとする。その結果、「弱者」の間で争いが起ったりする。そういった事実を見るのであれば、平等だの権利だのを主張する人は、それら自体が大事だと思っているのではなくて、自分にとってそれらがいまなければならぬものだから主張しているのだという見方も、ある一面において真理であるといえる。

しかしながら、このような見方もまた、全面的に支持できるものではない。なぜなら、それは、既得権益を脅かされることを嫌う者の考えであったり、あるいは、求めても得られないものを、葡萄をほしがっていた狐のように「どうせ、あんなものは」と蔑む者の考えであったりするという側面をもっているからである⁽⁵⁷⁾。前者の心情に支えられた悲観主義は傲慢以外の何物でもなく、後者の心情に支えられた悲観主義は過度にナイーブなものであるということもできるであろう。それならば、人の罪について徹底的に考えた上で、それでもなお、人の可能性を認めるというのは、どのようなことを意味するだろうか。

一般にイメージされる性悪説ないし悲観主義とは、人に関してある一定の評価基準⁽⁵⁸⁾を立てて、それに基づいて、だから人は駄目なのだという評価を下す立場のことをいう。そこにおいては、事物の測定基準⁽⁵⁹⁾と評

(57) もちろん、全面的な支持を否定する理由は、他にも存在する。ただし、それらについては、ここでは触れることができず、別稿の課題としたい。

(58) ある一定の価値ないし理想を前提に、対象の価値を測定するための基準のこと。

(59) 事物の構造や変化の法則に関する一定の知見を前提に、対象の状態を把握・

価値基準との、存在論と価値論との混合が見られる。これに対して、人の本質についての強靱な観察者は、測定基準と評価基準、および存在論と価値論を区別し、人の本質について何らかの判断をする際には、まず記述的な視点から、その見解を形成していく。このような論者は、自分の感慨とある一定の作法に基づく認識とを区別しようとする。つまり、ここにおいては、認識はあくまである作法に基づくものとなり、こうしたい、こう思いたいという日常を現に生きている者の思惑や感慨とは、一応区別されることとなるのである。そして、この区別がある程度可能になるのであれば、人一般について「性悪説」的な見解をとりつつ、ある人を好きだと思ったり、愛おしいと思ったりする、あるいは何かの価値のために働きたいという、この心の動きの価値を正面から承認することも可能になるであろう。その際、好きだという感慨、あるいは愛おしいという感慨、自己利益に執着している中で、自己の心理や行動における「利他的」といえるような動き、あるいはそのような、もっぱら内面的事柄に限定されず、抑圧の中で抑圧者も被抑圧者も同様に自己利益に固執していたのが、(1994年の南アフリカの総選挙のときのように)解放によってすべての人が新しいものへと関与し、貢献しようとしていることへの驚きが、まさに新鮮な驚きとして実感されることになる。これこそがヴィラ・ヴィッセンシオ（あるいはおそらくベラー (Robert N. Bellah) やレヴィナス (Emmanuel Levinas) など⁽⁶⁰⁾）のいうところの、神の新しさということなのであろうと推察されるのである。

もっとも、上の図式に、ヴィラ・ヴィッセンシオを完全に当てはめられるのかということについては、はっきりとしたことはいえない。過度の悲

分類するための基準のこと。

- (60) もちろん、レヴィナスは内面的な事柄に傾斜し、ヴィラ・ヴィッセンシオ、そしておそらくベラーなどは、政治などといった事柄に傾斜しているという違いは存在するであろう。しかしながら、このような違いは、彼らの活動や性格、その社会的背景などに基づくものであり、本質的な違いであるということとはできないように思われる。

観主義と過度の理想主義の中間に、人間への熱い思いが過酷な現実の認識とせめぎ合いながら、ひとつの人格を形成しているという領域も、あるいは存在し得るであろう。そこでは、測定基準と評価基準、存在論と価値論の区別は、上において図式化したほど、明確になされていないという可能性もある。だが、その論者自身がどう思っているかということとは別に、そのような内面的な緊張関係は、上の図式的な区別をその思考や活動の働きの上において実現するのである。

上のような位置に立ちつつ、ヴィラ・ヴィッセンシオは、再建の神学の理念的目標を次のようなものとしている。つまり、それは、社会においてもっとも虐げられており、もっとも貧しい者を最優先せよという聖書の命法に促されつつ⁽⁶¹⁾、「資源や権力が少数者（金持ちおよび権力者）から多数者（貧者および弱者）へと移されるのを促進するのに必要とされる、物質的・イデオロギー的資源を増進する⁽⁶²⁾」ことを通じて、常に回帰してくる捕囚の状態からの解放を目指すことである。それは、いままでの解放の神学のように、No ということのみを目指すものではないが、人々のもつ自由への意志に、力の限り応答していこうとするものである⁽⁶³⁾。したがって、やはり解放の神学の一種であるとされるのである⁽⁶⁴⁾。

(iii) 理論と実践

上においては、ヴィラ・ヴィッセンシオの人間観がどのようなものであるかを見て、さらに、それが再建の神学の理念的目標にどのように反映されているかについて検討してきた。ところで、上のようなものとしての再建の神学は、必然的により世俗的な事柄に積極的に関わっていくことになるであろう。しかしながら、これに対しては、否定的な向きも存在する。そして、そのような反応が、決して根拠なきものでないことは、権力と教

(61) See Charles Villa-Vicencio, *supra* note 12, at p16.

(62) *Id.*, p39.

(63) *Id.*, p24.

(64) *Id.*, p8.

会の歴史が示してくれるであろう⁽⁶⁵⁾。教会とその教えは、権力側に取り込まれることによって、単なる御用学問に墮し、権力による民衆の抑圧を黙認したり、あるいはそれを正当化さえてきたのである。これらの事実を振り返るのであれば、解放の神学にせよ、再建の神学にせよ、同じ轍を踏まないという保証はどこにもない。とくに再建の神学は、体制構築の過程に積極的に参与していこうというのであるから、その危険性は批判と抵抗を事とする、純然たる解放の神学よりも大きいといわざるを得ないであろう。だが、このような危険性にもかかわらず、理論や内面の静寂のうちに止まることもまた、教会や神学にとって許されることではない。なぜなら、静寂主義に徹することによって、教会や神学は、この世のものならざる存在を志向するという性質上、またその影響力からいっても、既存の秩序の問題点の存続を看過し、助長し、時には反動に手を貸すことさえなし得るからである。ヴィラ・ヴィッセンシオは、実践が伴わないのであれば、宗教は、本当にマルクスのいうように、民衆のアヘンとなってしまおうとする⁽⁶⁶⁾。これを避けるためにも、教会も神学も積極的に実践に取り組んでいかねばならない。そして、その実践は絶えず、貧しい者、排除された人々の観点から評価されねばならないのである⁽⁶⁷⁾。

もっとも、実践といっても、それは教会や神学が民衆に対して、現実の解放と再建のプロセスについての特定の解釈を押し付けることを意味しない⁽⁶⁸⁾。その課題は、もっぱら人々によるプロセスの神学的解釈を手助けすることにある。それゆえ、理論と実践は協同関係にあるとされる⁽⁶⁹⁾。そして、再建の神学は、特定の政治的思想・構想を絶対視したり、逆に神学的見地から、それらをすべて劣ったものとみなしたりしてはならない⁽⁷⁰⁾。これらは、やはり、有限な存在としての人という認識に基づく主

(65) *Id.*, pp19-23.

(66) *Id.*, p31.

(67) *Id.*

(68) *Id.*, p24.

(69) *Id.*, p276.

張であるといえよう。なぜなら、有限な存在としての人には、絶対的な価値がその文脈において何を意味するのかを完全に把握することなどできず、常に過ちと共に歩いていくより他、道はないからである。これを認めずに自分の信念のみが正しいとするのは狂信でしかなく、どうせ過ちしか犯せないのだから、現状のままでよいとするのは単なる現状肯定主義でしかない。したがって、再建の神学は、人の限界を常に念頭に置きつつ、特定の社会の文脈に即しつつ、絶対的な価値の可能な限りの実現を目指すのである⁽⁷¹⁾。さらに、再建の神学における実践は、できるだけ、世俗的な装いのもとになされなければならない⁽⁷²⁾。なぜなら、教会や神学は、キリスト教徒だけを救済の対象とするものではないからである。

以上が、ヴィラ・ヴィッセンシオの主張する再建の神学を支える理論的な枠組みである。

(2) 再建の神学と法・政治

上で見たように、再建の神学は、世俗の活動に積極的に関与し、しかも神学的な仕方ではなく、世俗的な方法で実践を行っていくものである。それでは、このような活動は実際、どのようにして行われ、あるいは議論がどのように展開されていくのであろうか。

ヴィラ・ヴィッセンシオは、再建の神学の理論および実践において、神学と法学の遭遇 (encounter between theology and jurisprudence)⁽⁷³⁾ ということを主張する。再建の神学が国家・社会の再建に参与しようとするものである以上、それは、国家・社会の枠組みを提供するものとしての法に真剣に取り組まざるを得ないであろう。また、他の社会においてというだけでなく、とくに南アフリカにおいて問題となったこととして、長きに渡っ

(70) *Id.*, p39.

(71) *Id.*, p41.

(72) *Id.*, p12, 25, 116.

(73) *Id.*, p12.

て、法が黒人を抑圧し、搾取するための、非常に効果的な武器として使用されてきたという現実がある⁽⁷⁴⁾。このことだけでも、再建の神学が法と真摯に向き合うべき理由となるであろう。

もっとも、法学との遭遇といっても、法学にはそれなりの問題が存在する。とくに、リベラリズムの法理論および政治理論は、近年、フェミニストや批判法学などの、社会的な弱者の視点に立とうとする様々な立場から、痛烈に批判されている。そして、これら批判者たちの立場と、ヴィラ・ヴィッセンシオの立場は、実のところ、限りなく近いものである。つまり、それらは、形式的な自由・平等に対して実質的な自由・平等を、手続的適正さの追求よりも／だけでなく、構造的な問題への注視を、特殊意思よりも一般意思を重視するのである。実際、ヴィラ・ヴィッセンシオは、『再建の神学』の中で、これらの立場に対して、非常に好意的な評価をくだし、また彼らの説を自分の議論に援用している⁽⁷⁵⁾。それにもかかわらず、ヴィラ・ヴィッセンシオは、法の支配などといった、大方のリベラリズム批判者が、どちらかといえば拒否反応を示すような概念を積極的に使用しようとしているのである。それでは、このような、一見すると矛盾しているかのように見えなくもない議論の展開は、いかにして可能となるのであろうか。

ヴィラ・ヴィッセンシオは、法・政治を語るにあたって、リベラリズム法学の人間観・政治論・法思想などを全面的に批判的検討の対象としている⁽⁷⁶⁾。もっとも、その議論は、文脈の軽視、構造的差別の軽視ないし無視、自らの非中立性の隠蔽など、いずれも様々なリベラリズム批判者たちによって共有されているものであり⁽⁷⁷⁾、とくに新しいものは見られない。

(74) *Id.*, chapter 2.

(75) *Id.*, pp98-100.

(76) *Id.*, chapter 3, 5.

(77) リベラリズムに対する諸批判をまとめたものとしては、拙稿「英米における自由主義的刑罰論への批判の本意と『批判後』の刑罰論に関する一考察：ダフ(Duff)の政治理論・刑罰論の検討」比較法学第39巻第1号(2005年)70-91

ここで、注目すべきは、このように批判されるリベラリズム法理論・政治理論にかわって、再建の神学の立場から提起される人間の尊厳、人権、法の支配、民主主義などの議論である。これらに関するヴィラ・ヴィッセンシオの議論の特徴は、文脈性を重んじるところにある。しかしながら、ただ単に文脈性を重んじるというだけでなく、それが同時に罪の刻印を受けていることを強調する点で、ヴィラ・ヴィッセンシオの議論は安易なコミュニタリアニズムのそれとは区別される。文脈は、人として愛おしむ面も当然出てくることが多いであろうが、それ以上に、それに束縛されざるを得ないものである。だからといって、これを無視ないし軽視することは不可能であり、危険でもある。なぜなら、ある文脈が、ある「絶対的」な価値に適合しないからといって、これを即座に否定するのは、独裁者ないし全体主義者の態度だからである。つまり、徐々にしか変化できないという文脈の性質を無視し、「絶対的」な価値を貫くためには、これを「阻害」するものを圧倒的な力をもって排除ないし抑圧するより他、道はないからである。

このように、文脈に対して相反する心情を抱きながら、それでも人は、その文脈の中にある、わたしやあなたを大切にしようとし、ともに人間として生きていこうとする。その際、その生きられるべき人間性とはどのようなものか、つまり人間の尊厳とは一体どこにあるのかというと、それは、私利私欲の固まり、あるいは合理性の機械としての個人 (individual) とは区別される存在として的人格体 (person) に体现されるものなのである⁽⁷⁸⁾。この人格体とは、「他の人々、自然界の秩序、そして神の超越性の認識を含むところの、現実世界の文脈の内部において⁽⁷⁹⁾」それとなるところのものである。つまり、人間の尊厳とは、個人の殻に閉じこもり、自己利益にのみ固執することをやめ、自らが罪だけではなく、他の人

頁参照。

(78) See Charles Villa-Vicencio, *supra* note 12, at pp155-6.

(79) *Id.*, p156.

間たち、および自然とともに在ることを見出し、すべての人間や自然と平和のうちに暮らすことができるような社会を目指して、いまの文脈の中で行動していこうとすることのうちに存するのである⁽⁸⁰⁾。

このような人間の尊厳に関する見解が、先に見た、人の本性に関するヴィラ・ヴィッセンシオの洞察に裏付けられたものであることは明らかであろう。そして、さらに、この洞察は、人権、民主主義、法の支配に関する、彼の議論にも反映されているのである。

まず、人権に関して、ヴィラ・ヴィッセンシオは、第一世代の人権だけでなく、第二世代・第三世代の人権をも尊重しなければならないとする⁽⁸¹⁾。文脈性の認識は、形式的な自由・平等だけでなく、実質的な自由・平等の実現を目指すことを求める。腹ペコのままでは、人は、政治について、あれこれ考えたり、討論したりすることはできない。また、着るものがなければ、人は、投票所にいたりすることはできないのである。ヴィラ・ヴィッセンシオによれば、人権実現の追求は、「人間であることの意味の本質的部分⁽⁸²⁾」であるとされる。人は文脈に不可避免的に囚われながら、より気高いものを求める。人権は、まさにその気高きものであり、「神の贈り物であり、請求 (demand) でもあるもの⁽⁸³⁾」なのである。

次に、民主主義であるが、ヴィラ・ヴィッセンシオによれば、再建の神学は、必然的に民主化を求めるものであるとされる⁽⁸⁴⁾。社会において、もっとも虐げられ、もっとも貧しい人々の人権が実現されるためには、これらの人々が声をあげることができるようなシステムが存在しなければならない。それは、例えば目安箱のように、ただ単に恩恵的に要求を聞き届けてやるというものではない。そうではなくて、これらの「弱者」が主体的に政策形成のプロセスに参加できるようなシステムが整えられていなか

(80) *Id.*, pp164-81.

(81) *Id.*, pp120-1.

(82) *Id.*, p148.

(83) *Id.*, p149.

(84) *Id.*, pp46-7.

ればならないのである。そこでは、人種、民族、性別などに基づく差別への批判が提起され、環境への配慮が主張され、これらの主張を考慮した施策がとられるべきなのである。つまり、ここにいう民主主義とは手続的・間接的なものではなく、より実質的・直接的なもののことをさす。

最後に、法の支配であるが、これについては、上記のようにリベラリズム批判者からの、様々な批判が存在する。そして、それらには一定程度の真理が含まれていることも事実である。しかしながら、ヴィラ・ヴィッセンシオによれば、法の支配についてはまず、権力者・強者による権力の恣意的な行使から、人々、とくに弱者の最低限の権利を守るという利点に着目しなければならないとされる⁽⁸⁵⁾。人の本性上、権力は必ず墮落する。したがって、権力を常に監視し、抑制するものがなければならないのである。

そして、ヴィラ・ヴィッセンシオは、さらに進んで、国家・社会の根本的な価値を体現するものとしての法という観点に着目する⁽⁸⁶⁾。しかしながら、このようなものとしての法は、静態的なものとして捉えられ、絶対化されてはならない。その場合には、悪しき法実証主義の支配が実現されることとなろう。これに対して、ヴィラ・ヴィッセンシオは、事象の動態性を強調する。彼自身の言葉を引き合いに出すのであれば、「出来事は始まりを」もち、そして同時に「出来事はプロセスでもある」のである⁽⁸⁷⁾。つまり、これを法に特化した形で述べるのであれば、法は非常に複雑かつ動態的な過程を経て形成され、そこで止まることなしに、様々な仕方で解釈されたり、修正されたり、あるいは廃止されたりするのである。

このようなものとしての法は、その前提として、民主主義のプロセスに支えられていなければならない⁽⁸⁸⁾。そして、そのようなプロセスを通じ

(85) *Id.*, pp102-9.

(86) *Id.*, pp110-1.

(87) *Id.*, p112.

て、生成され、かつ常に生成の途上にあるものとしての法は、人権という価値を体現するものでなければならない⁽⁸⁹⁾。

(3) 再建の神学と経済

ヴィラ・ヴィッセンシオは、『再建の神学』において、経済の問題の考察のために、2つの章をあてている。これは、彼の現実への視線をよく表すものであるといえよう。人間は、お腹をすかせた状態では政治にも文化にも参加することはできない。さらに、経済力を有する者は、法や政治においても権力を発揮する——このような洞察が、世俗に徹する神学者ヴィラ・ヴィッセンシオをして、人権や民主主義の問題だけでなく、経済の問題の考察にまで赴かせた動因となっているのであろう。したがって、ヴィラ・ヴィッセンシオは、考察に際して、まず、もっとも虐げられ、もっとも貧しい人々の視点に立つという原則を確認すると同時に、西欧型資本主義の文脈を徹底的に分析することを主張する⁽⁹⁰⁾。

まず、ヴィラ・ヴィッセンシオは、現代社会における経済の力の強さを指摘する⁽⁹¹⁾。はるか昔においては、政治が経済に優越していたが、今日においては、その関係はむしろ逆転してしまっている。このような状況において、リバータリアニズムは自生的秩序としての市場に対して全面的な信頼を寄せるのであるが、これは現実を見ない議論であるとされる⁽⁹²⁾。資本主義は個人やさらには国家の隷従を生み出し、格差を拡大させる。ヴィラ・ヴィッセンシオは、この隷従や搾取が「資本主義プロセスの不可避的な部分であり、(自由市場主義者が暗示するように)民主主義的参加によって干渉を受けないままで放置されるというのであれば、これらの構造は破壊される必要がある⁽⁹³⁾」とまで述べている。

(88) *Id.*, pp92-3.

(89) *Id.*, pp113-6.

(90) *Id.*, pp200-1.

(91) *Id.*, pp204-9, 238.

(92) *Id.*, pp212-5.

もつとも、だからといって、ヴィラ・ヴィッセンシオは生産手段の国有化などを主張するのではない。国家社会主義に見られる、国家権力の絶対化は、人の本性や権力の性質に関する致命的な楽天主義に基づくものである。再建の神学においては、むしろ経済の民主化が求められる。人々は、最低限の生活の保障を受けつつ、経済の諸々の過程に主体的に参加していく。そして、教会は、この参加を手助けし、すべての経済政策を弱者の視点から検討し、批判するという仕事に従事すべきだとされるのである⁽⁹⁴⁾。

2 小括——神学的背景と神学的議論との区別のために——

ある理論の深度というものは、人が日常生活の中で感じる事柄、とくにもっとも切実な問題としている事柄について、その理論がどれほど真摯に応答できるかに係っているといっても過言ではないであろう。それも、ただ単に情報や助言をもたらすというのではなく（それはすでに実践の領域に属する）、その事柄を、ひとりひとりの生や人と人との時間的・空間的なつながりの中でどのように位置づけ、どのような戦略のもとで取り扱っていくのがよいかを考えるための手助けとなる装置を提供するというのが理論の役割であるように思われる。そして、ヴィラ・ヴィッセンシオが目指しているのも、このような方向であるように思われるのである⁽⁹⁵⁾。

ヴィラ・ヴィッセンシオの神学的議論の特徴は、純粹に神学的テーマを扱うのではなく、キリスト教徒に対して、世俗的・法政治的な事柄、つまり人権や民主主義、法の支配などを支持し、促進することが、まさにキリスト教を信じる者の責務であることを語りかける点にある。このような語りかけの重要性を無視ないし軽視する神学は、ヴィラ・ヴィッセンシオにとっては、神学ですらなく、その語りかけに耳を貸さず、弱者のために行

(93) *Id.*, p215.

(94) *Id.*, pp239-43, 248-51.

(95) *Id.*, p40, 130.

動しないキリスト教徒は、単なるキリスト教フェチではあり得ても、もはやキリスト教徒ではないというのが、ヴィラ・ヴィッセンシオの強烈な語りかけであるといつてよいであろう。それは、南アフリカの現実を前にしての、ヴィラ・ヴィッセンシオの怒りと人間の可能性への信念、そして南アフリカのキリスト教徒だけでなく、世界中の同胞に呼びかけ、その行動を奮起させようという情熱の発露なのである。しかしながら、それでは、ヴィラ・ヴィッセンシオが神学的理論を一切拒絶しているかということ、それは否といつてもよいであろう。神学、あるいは、神とその人間に対する呼びかけをめぐる真摯な問いは、ヴィラ・ヴィッセンシオの、一見すると世俗的な実践に傾斜しすぎにも見える議論を支える柱となっていることは、上述の彼の議論の理論的枠組みから明らかなことのように思われるのである。再建の神学とは、神の前での人の罪深さとその可能性をめぐる真摯で理論的な探求の深みから沸きあがってくるものの名である。そして、彼の修復的正義論は、そのような神学を背景としての、彼の、純粋に世俗的な議論であるといつてよいであろう。

ところで、TRC に関しては、そのキリスト教的偏向性に対する批判が存在する⁽⁹⁶⁾。確かにツツ (Desmond Tutu) にはその色彩が濃厚であり⁽⁹⁷⁾、ヴィラ・ヴィッセンシオについても、その理論的背景に、神学があることは上で見たように事実である。しかしながら、ツツにおいてははともかく、ヴィラ・ヴィッセンシオの TRC 「擁護」(およびその評価のための) 論としての修復的正義論は、まったくキリスト教徒だけのための議論なのであるか。

(96) 阿部・前掲論文(注6)136-142頁参照。また、キリスト教的な立場からの TRC 擁護論への批判として、宇佐美誠「過去と向き合う：真実究明委員会の道徳的基礎」中京法学第35巻3・4号(2001年)89頁参照。

(97) See Desmond Mpilo Tutu, *No Future Without Forgiveness* (London: Rider Books, 1999); Charles Villa-Vicencio, *The Spirit of Freedom: South African Leaders on Religion and Politics* (California: University of California Press, 1996) pp274-85.

ここで、背景にキリスト教をもつことと、キリスト教のためだけに語ることは、区別されなければならない。前者のような事実から、後者のような目的は、必然的に導かれることはない。もちろん、前者が、論者に後者的な偏りをもたらすことは、事実としてあり得る。しかしながら、単なる「身内びいき」を拒絶し、人の宿命について徹底的に考察するところから湧き上がってくる理論は、「～教的」といった性質を超えていく可能性を有する。そして、ヴィラ・ヴィッセンシオの修復的正義論は、まさにそのような理論なのである。それは、人の本性・法と政治の本質に関する洞察を前提に、現代社会の構造・南アフリカの文脈を見極め、それに即した処方箋を提供しようとする。そこで提供される処方箋は、確かにある一定の理念に導かれているが、その理念は、人間の可能性への信念、あるいは人をいとおしむ心、あるいは人をあきらめきれないという思いなどから出発し、その思考的な帰結を見極めようとする者であれば、誰でもそこに辿りつき得るものなのである。

もちろん、この困難な思考の過程を支えるパトスを、キリスト教がもつともよく提供し得るといふ事情が存在するという可能性もあるであろう。その場合、この思考とそれが示す処方箋は、他の宗教、あるいは無神論者にとっては、押し付け以外の何物でもなくなる危険性がある。しかしながら、現実の状況に関する透徹した分析が指し示す方向を拒絶するのであれば、それは、その者個人の恣意でしかなくなるであろう。

以上の事柄は、実のところ、ヴィラ・ヴィッセンシオの修復的正義論だけでなく、再建の神学それ自体についても当てはまるように思われる。再建の神学の議論を支えるパトスは、確かにキリスト教のものである。しかしながら、その洞察・その信念は、人の本性・可能性について深く考えようとする者にとって共有できるもののように思われるのである。したがって、ここから、次のことが確認できるように思われる。つまり、その多くがキリスト教的背景を有さない日本の論者においても、ヴィラ・ヴィッセンシオの議論は参照可能であり、しかも単なる熱狂主義に墮さないための

枠組みを提供するものとして、彼の議論は非常に重要なものであるということが、である。

四 若干の検討

さて、以上の記述に通じて、ヴィラ・ヴィッセンシオの修復的正義論と再建の神学の全体像および両者の関係について考察してきた。そこでは、彼の修復的正義論の深度と枠組みが、その背景にある神学のそれを参照することによって検証され、同時に、キリスト教的背景を持たない者にとっても、この枠組みは参照可能なものであることが確認された。

ところで、これまでの記述においては、ヴィラ・ヴィッセンシオの理論の肯定的な側面に焦点をあててきた。そこで、本章においては、いくつかの疑問点を提示することをもって、ヴィラ・ヴィッセンシオの理論の全体像の粗描を締めくくりにしたい。

まずは一般的な問題から見ていくことにしよう。第一に、理論の基本的枠組みの射程範囲はともかくとして、実際の犯罪対処に関する処方箋の射程範囲が明らかではないように思われる。もちろん、ヴィラ・ヴィッセンシオは、南アフリカの、それも通常の犯罪ではなく、大規模で重大な人権侵害への対処という文脈に即しつつ、語っているという事情が存在することは確かである。被害者の回復のためにも、国民統合を目指さなければならないという状況下で修復的正義を主張するという展開にもそれなりに納得できる部分は存在する。しかしながら、それでは、一応は社会体制が安定し、司法システムもそれなりに作動している先進諸国において、正義における修復的正義の側面は後退してしまうのであろうか。もっとも、これは、ヴィラ・ヴィッセンシオに対して提示すべき疑問というよりは、日本の文脈において、我々自身が問うべきことであるかもしれない。

第二に、一般的な犯罪ではなく、大規模かつ重大な人権侵害の問題に焦点を絞るとしても、真実和解委員会ないし真実究明委員会と、国際刑事裁

判所ないし国内の裁判所における訴追との関係について、どのように考えていくべきなのかが、必ずしも明らかでないように思われる。もちろん、国によって事情が様々であるが、両者の関係について、戦略的・理念的・法的な思考枠組みを構築することに意味がないとはいえないであろう。

第三に、既述のように、修復的正義と応報的正義の理念的な関係の整理が、必ずしも十分ではないように思われる。ヴィラ・ヴィッセンシオ自身が論じているように、修復的正義においても公的罪難の要素は不可欠であり、応報的正義においても必然的に害悪の付与が目指されるわけではない。そうであるならば、正義という連続体の両端に位置するものとしての修復的正義と応報的正義という整理よりも、もっと別の整理が必要になってくるように思われる⁽⁹⁸⁾。そして、ヴィラ・ヴィッセンシオの理論全体を俯瞰するのであれば、すでにその中に、例えばその人間観などのような、理論的前進のための素材が存在している。

次に、南アフリカの文脈に関する問題を見ていく。第一に、TRCは一度きりの出来事ではなく、一連の修復のプロセスの出発点にすぎないとしながらも、その後の方策のあり方が必ずしも明らかではないように思われる。構造的差別の問題および経済の問題については、それなりの取り組みが見られるが（むしろ、そちらへの傾斜があるといってもよいであろう）、個々の被害者の、具体的な被害そのものへの取り組みについて、ヴィラ・ヴィッセンシオは、言及こそすれ、必ずしも明確に論じていない。しかしながら、例えば、被害者のトラウマ、あるいはとくに強姦などの被害者における、TRCにおいてさえ、声をあげることが並大抵のことではなかったという事情に対して、どのように対処していくべきか、その対処法などについての議論が望まれるところである。

第二に、資本主義の性質に関する分析が不十分であるように思われる。

(98) この問題はヴィラ・ヴィッセンシオに限ったことではない。拙稿「共和主義政治理論・刑罰論の射程範囲：修復的正義とプレイスウェイト・ペティット」比較法学第40巻第3号（2007年）37-50、56-61頁参照。

社会主義の夢が悪夢であったことが明るみに出され、とりあえず、現時点においては、それしか見当たらないとはいえ、資本主義が不可避免的にそのシステムから排除されていく者たちを生み出すものである以上、いくら経済が発展したところで、否、むしろ、それゆえにこそ、貧困の連鎖の中に巻き込まれていく人々もいるであろう。そして、旧体制の被害者たちこそ、もっともその餌食となる可能性が高い人々なのである。もちろん、すでに見たように、ヴィラ・ヴィッセンシオも、その人々の観点からの、あらゆる経済政策の検証と批判が必要であると主張している。そして、彼は、南アフリカの市民社会の努力と国際的な市民社会の支援、そして、なによりも教会が先頭を切って弱者の支援に携わることを期待しているのであろう。しかしながら、資本主義の強大さ・冷酷さを前にして、それだけに留まらぬ考察と実践が必要とされているようにも思われるのである。